

# 乳幼児期における母性的養育環境の相違と 発達に関する縦断的研究 (3)

## —小児の初期環境における Separation, Deprivation

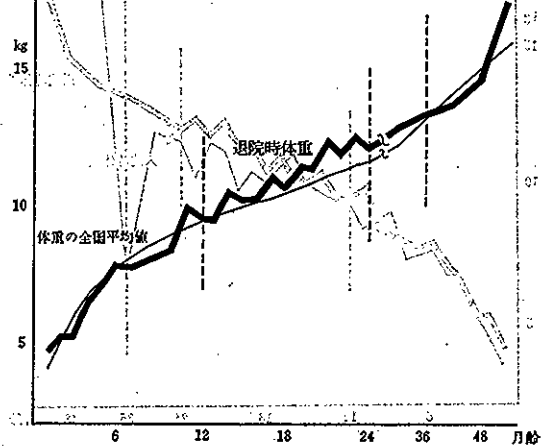
### の影響に関する研究 2—

研究第5部

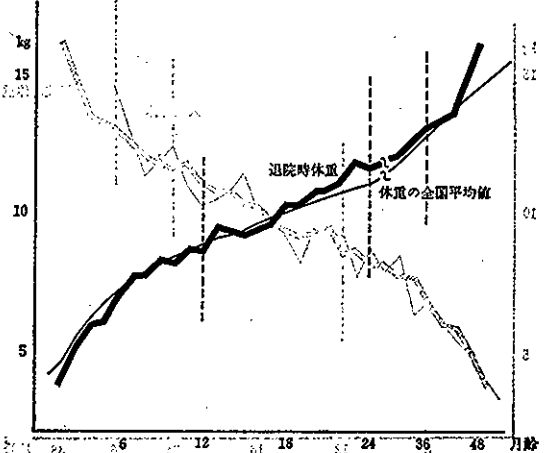
網野 武博・萩原 英敏  
金子 保

厚生省の標準値(昭和55年)と比較して図示すれば、第1~2図の通りである。男児、女児ともに、全体として

第1図 退院時体重と体重の全国平均値との比較 (男児)



第2図 退院時体重と体重の全国平均値との比較 (女児)



乳幼児期の分離 (Separation) と喪失 (Deprivation) の経験は、その後の精神身体発育に対し、さまざまに影響する事実が知られている。本研究は、この事実に関する文献的研究に引き続き実施された実証的研究を受け継ぐ研究の一部である。

### II 研究方法

本研究に先立ち、すでに実施された実証的研究は、K 県のD乳児院に開設以来在籍していた全乳幼児を対象にカルテ調査を行い、Separation, Deprivation の経験の影響について考察を加えたものである。そのときの研究方法と結果の考察に基づき、本研究では全国125か所の全乳児院に対し、カルテ調査と同一内容によるアンケート調査を実施した。

対象としたのは、昭和55年11月~昭和56年1月の3か月間に措置解除及び措置変更(退院)となった乳幼児で、資料は昭和55年12月上旬に送付された。アンケート内容は、資料1~2の通りである。

アンケートの回収成績は、109施設(回収率87.2%)で、対象児数は510名(男児283名、女児227名)である。なお、109施設の公私の内訳は、公立14施設、私立94施設で、無記入が1施設であった。

結果は、主として統計的に処理された。このうちDQ値については比率DQで、発達領域毎に、第2表の発達日月齢を用いて算出した。全体DQは、それらの算術平均である。

### III 結果と考察

#### (1) 対象児の体重

##### ① 退院時体重

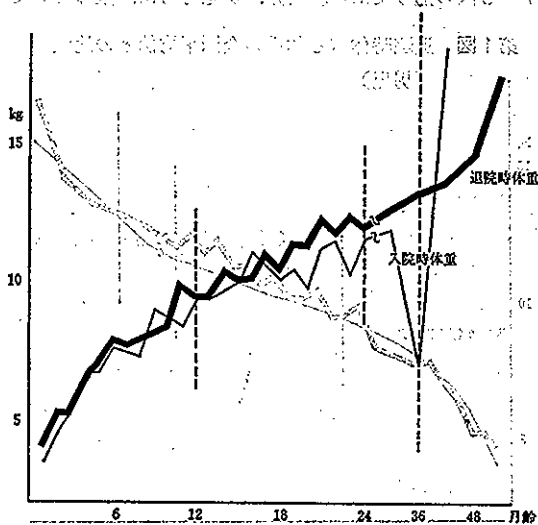
退院時における対象乳幼児の体重計測成績を男女別に

厚生省値とほぼ一致している。月齢別に検討すると、1歳未満の乳児期よりも、それ以降の乳児期の成績が勝り、厚生省値を上まわる傾向が認められる。この傾向は、前年度に実施されたD乳児院における調査成績と一致している。乳児院の近年の養育効果を示唆する結果のひとつと考えられる。

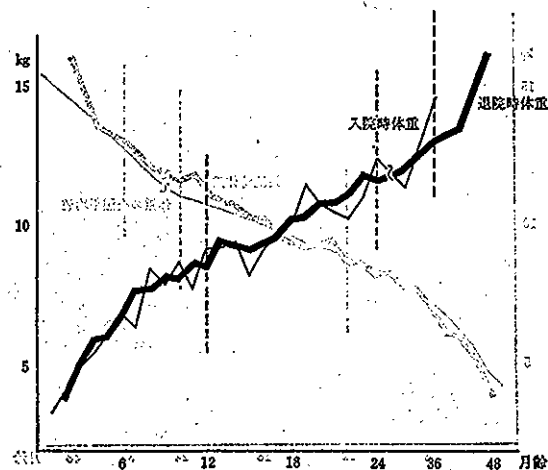
② 入院時体重と退院時体重の比較

つぎに、退院時体重の結果と入院時体重を同じように比較すると、女兒はほぼ一致しているのに対し(第3図)、男児の結果は1歳半以降、退院時の成績が高い(第4図)。この結果からも従来多くの研究結果とは逆に、むしろ乳児院の養育の効果が示唆される。とくに、乳児院では

第3図 入院時体重と退院時体重との比較 (男児)



第4図 入院時体重と退院時体重との比較 (女児)

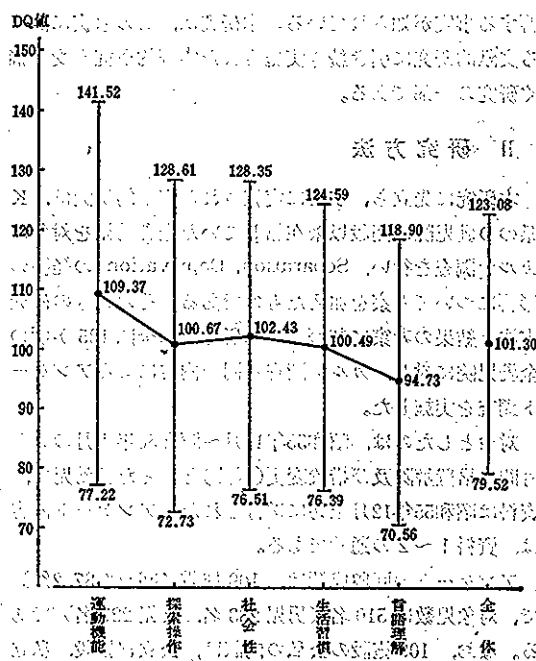


Deprivationによる栄養失調症児の養育を必要とする事態もめずらしくはない。こうした事情を反映している結果と考えられる。

第1表 領域別D.Q.値

領域	n	M	S. D.
運動機能	508	109.37	32.15
探索操作	504	100.67	27.94
社会性	501	102.43	25.92
生活習慣	499	100.49	24.10
言語理解	500	94.73	24.17
全体	510	101.30	21.78

第5図 領域別D.Q.プロフィール (M±S.D.)



第2表 領域別D.Q.値の差 (T-検定)

	運動機能	探索操作	社会性	生活習慣	言語理解
運動機能		***	***	***	***
探索操作			N.S.	N.S.	***
社会性				N.S.	***
生活習慣					***
言語理解					

\*\*\*... 1%水準

(2) DQ値の結果

① 領域別DQ値

DQ値の結果は、第1表に示す通りである。全体DQの値の平均は101であるが、領域別には運動機能が最も高く、言語理解は低い。プロフィールを描けば第5図の通り、ほぼ右下りであるが、探索操作、社会性、生活習慣の発達領域の成績は同一レベルにある。

そこで、領域別にそれぞれ平均値の差の検定(T-検定)を試みた。第2表が、その結果である。差の検定結果でも、探索操作、社会性、生活習慣の間には有意差を認めないが、これらと運動機能、言語理解の差は統計的に有意である。この結果は、全体DQが101とはいえ、領域別にみると、言語理解の発達が依然として遅滞していることを意味するものと考えられる。

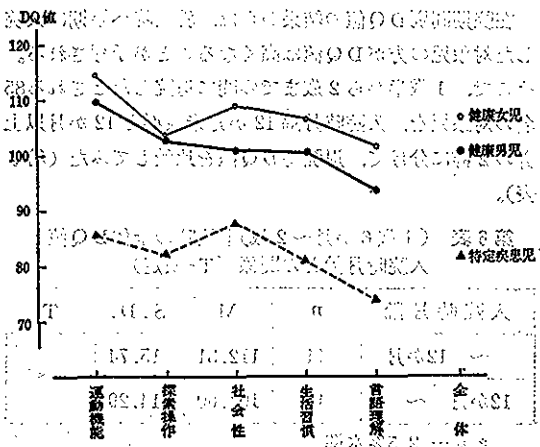
② 特定疾患児のDQ値

対象児510名のうち45名は、先天性心疾患、股関節脱臼、脳性小児マヒ等の疾患、あるいは未熟出生による発達遅滞が認められている。第3表は、在院中に、これら特定疾患を認めた児の領域別DQ値の結果である。

第3表 特定の疾患のある児の領域別D.Q.値

領域	n	M	S. D.
運動機能	45	85.64	38.06
探索操作	45	82.09	35.60
社会性	45	87.76	31.96
生活習慣	45	80.89	28.25
言語理解	45	74.13	30.78
全体	45	81.76	29.97

第6図 健常児、特定疾患児の領域別D.Q.平均値プロフィール



特定疾患児のDQ値を、健常児のそれと比較すると、いずれの領域でも健常児の成績が統計的に有意に高い。領域別プロフィールは、言語理解が健常児と同じく最低であるが、運動機能は健常児との差が大きく、最も高い領域とはなっていない(第6図)。

③ 健常児のDQ値における性差

プロフィール(第6図)からも明らかな通り、女兒の平均DQ値は、いずれの領域においても男児より高い。T-検定の結果は、運動機能、探索操作の運動系領域を除き、有意差が認められる。全体の平均DQ値も有意に女兒の成績が高い(第4表)。

第4表 健常児の領域別D.Q.値とその性差

領域	性	n	M	S. D.	T
運動機能	m	228	109.47	30.73	N. S.
	f	195	114.17	31.31	
探索操作	m	226	102.67	25.86	N. S.
	f	193	103.77	28.71	
社会性	m	226	101.04	22.88	***
	f	191	108.52	25.62	
生活習慣	m	223	100.43	21.65	**
	f	191	106.29	24.91	
言語理解	m	225	93.60	20.06	***
	f	191	101.42	25.24	
全体	m	230	100.52	19.33	***
	f	194	106.51	22.08	

\* ... 5%水準

\*\* ... 1%水準

④ 在院期間別DQ値

在院期間別のDQ値の結果は、第5表と第7図に示す通りである。第7図に明らかなように、在院期間が長期化するにともないDQ値は上昇傾向が認められる。そこで、各領域毎に在院期間別のDQ値の差について統計的に検定してみた( $\chi^2$ 検定)。その結果は、第7表に示す通りである。すなわち、運動機能、探索操作及び領域全体において1%水準で有意差が認められた。また、言語理解は2.5%水準で有意差を認めたが、社会性と生活習慣の領域については在院期間の長期化にともないDQ値の上昇カーブは認められるものの、統計的に有意ではない。

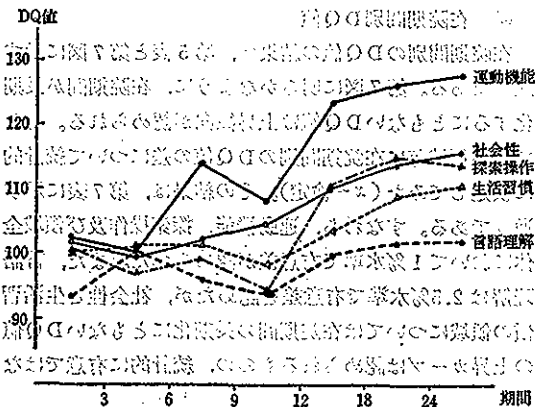
第5表 領域別D・Q値の在院期間別値とその差 ( $\chi^2$ -検定)

昭和33年10月

	3か月未満	3~6か月未満	6~9か月未満	9~12か月未満	12~18か月未満	18~24か月未満	24か月以上
運動機能	n	143	48	47	36	52	39
	M	102.47	100.67	114.02	107.94	123.67	126.08
	S.D.	32.10	32.73	23.69	27.59	30.32	26.08
	$\chi^2$	***					
探索操作	n	137	48	48	36	52	38
	M	100.72	96.90	98.98	94.56	110.79	115.11
	S.D.	31.18	20.81	20.37	20.29	24.83	25.93
	$\chi^2$	***					
社会性	n	137	47	48	36	52	39
	M	102.07	99.36	101.92	104.50	110.27	113.85
	S.D.	25.34	24.37	27.90	27.79	21.53	19.00
	$\chi^2$	N.S.					
生活習慣	n	137	47	47	36	51	39
	M	100.69	101.34	101.87	98.61	103.69	108.90
	S.D.	24.34	25.04	21.53	17.73	19.89	22.80
	$\chi^2$	N.S.					
言語理解	n	135	47	48	36	52	39
	M	93.45	100.38	95.92	94.00	99.83	101.62
	S.D.	27.40	20.66	17.79	23.40	20.61	20.22
	$\chi^2$	**					
全体	n	144	48	48	36	52	39
	M	98.69	99.77	102.54	99.03	109.67	112.97
	S.D.	21.28	19.93	17.13	16.98	18.29	18.31
	$\chi^2$	***					

\*\*\* 2.5%水準 \*\* 1%水準

第7図 在院期間別、領域別D・Q平均値のプロファイル



第6表 (1歳6か月~2歳)退院時の全体DQ値と入院時月齢との関係 (T-検定)

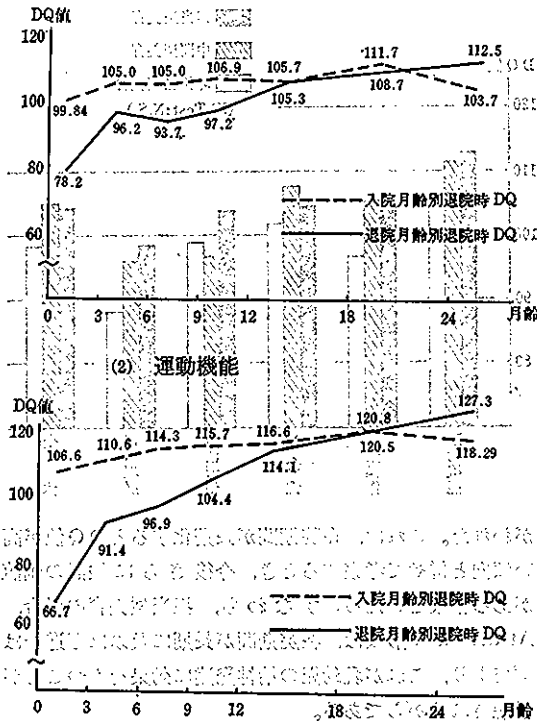
入院時月齢とDQ値  
 在院期間別DQ値の結果からは、乳児院へ早期に入院した対象児の方がDQ値は高くなることが予想される。そこで、1歳半から2歳までの間に退院したとされる85名の対象児を、入院時月齢12か月未満群と12か月以上群の2群に分けて、退院時DQ値を比較してみた(第6表)。

第6表 (1歳6か月~2歳)退院時の全体DQ値と入院時月齢との関係 (T-検定)

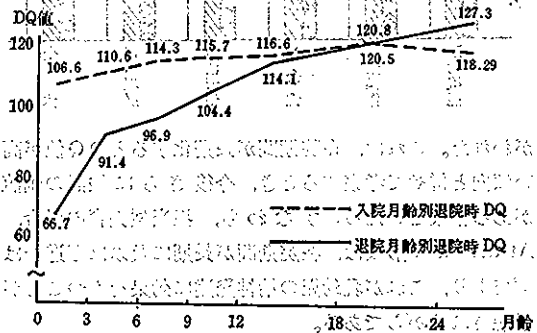
入院時月齢	n	M	S.D.	T
~ 12か月	44	112.31	15.74	**
12か月 ~	41	104.60	14.29	

\*\*\* 2.5%水準

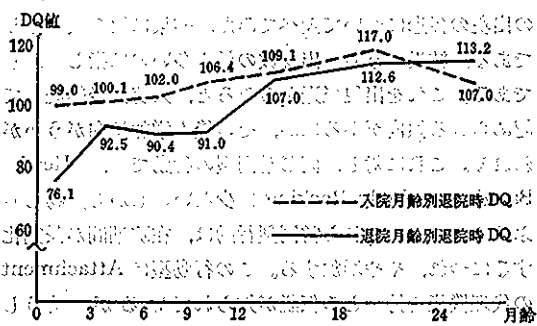
第8図 (1) 全(身体)のDQ値



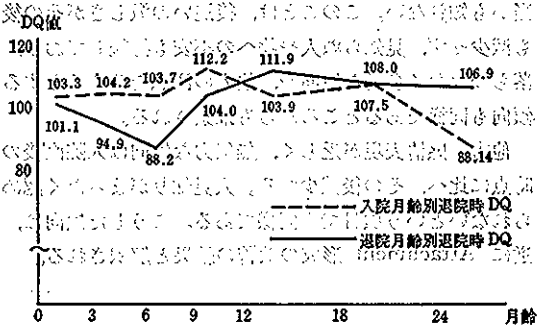
(2) 運動機能



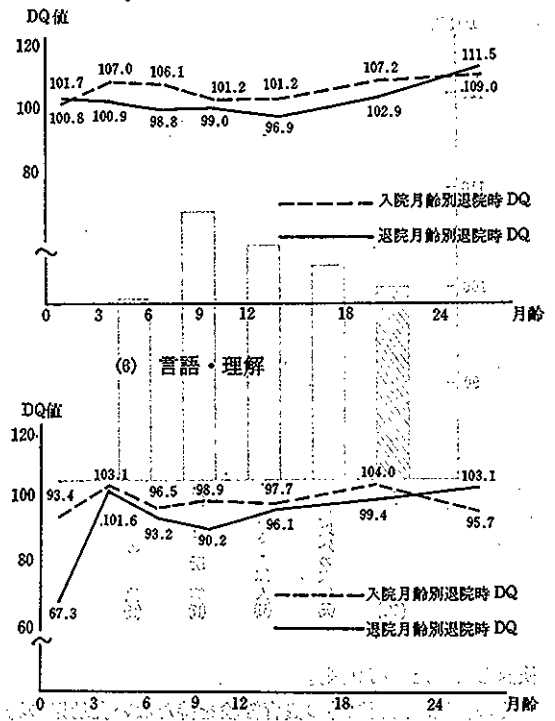
(3) 探索・操作



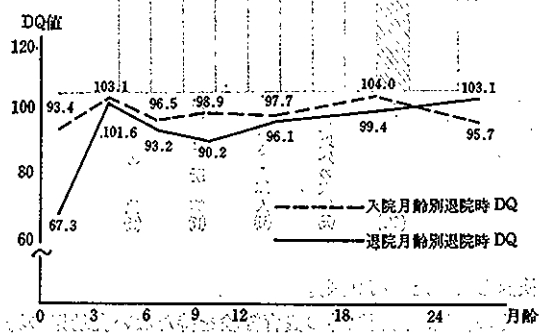
(4) 社会性



第8図 (6) 生活習慣のDQ値



(6) 言語・理解

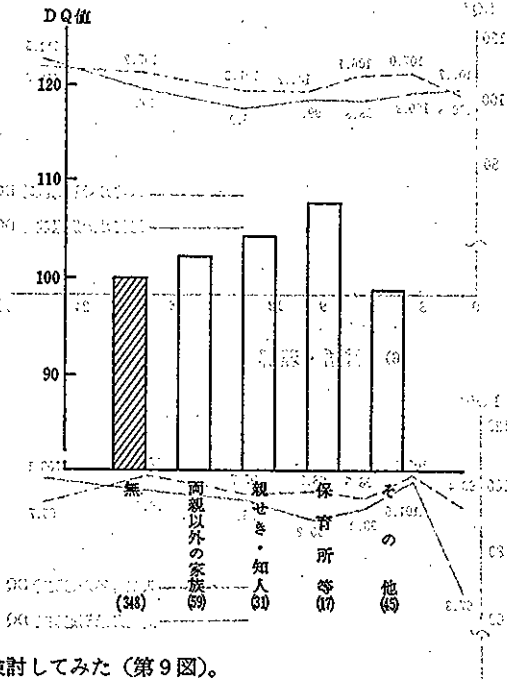


結果は予想通りであって、12か月までに入院した対象児のDQ値は、12か月以降に入院したDQ値よりも高く、その差は統計的にも2:5%水準で有意であった(T-検定)。この傾向をさらに分析するため、退院時のDQ値をそれぞれ入院時月齢別にみたところ、入院時月齢が進むにつれて運動機能・探索操作の領域では退院時のDQ値は高くなるが、その他の領域ではあまり変化が認められなかった(第8図(1)~(6))。

このことは、入院時月齢が低く、かつ在院期間が長いほど乳児院における養育の発達に対する効果が想定されることを意味していると考えられる。そして、内容的には対人関係を背景とする社会性、生活習慣・言語理解の発達領域よりも、事物や環境に対する操作活動を背景とする運動系の発達領域においてその効果がより大きいことが指摘される。

⑥入院前の養育経験とDQ値。在院が短期間の乳幼児の退院時におけるDQ値が低い傾向については、すでに指摘したのであるが、このことは入院前の家庭の状況や養育方法について考察する必要性をうかがわせる。アソケメントには入院前の養育経験についての記載欄を含めたので、養育経験別にDQ値を

第9図 入院前の両親以外による養育経験

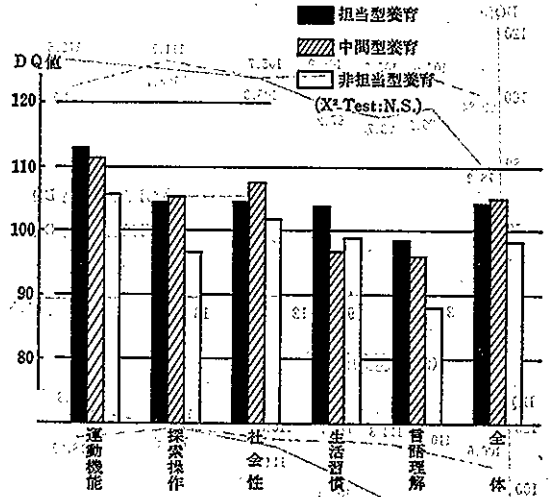


検討してみた(第9図)。

その結果、両親以外の養育経験を持たない乳幼児の場合にDQ値は最も低く、保育所等の養育を経験した乳幼児で最も高かったが、統計的有意差は認めなかった。この結果からは、家庭環境下で両親により養育されたにしても、その間の養育内容には、いわゆるmasked deprivationがふくまれている可能性が否定できず、これが発達成績に少なからず影響することが考えられる。なお、入院理由別に deprivation type と separation type に分けてD.Q値を比較したが、有意差を認めることはできなかった。このことは、入院時点での事情よりも、入院後の養育効果の方が、退院時DQに影響しやすいことを意味していると考察される。

③ 養育担当別DQ値の比較  
最後に、109施設のうち78施設(73.6%)で、いわゆる養育担当制(受持制)を採用していたが、これとDQ値の関係について検討してみた。このとき、養育担当制をとっている施設の養育を担当型養育とし、そうでない施設のそれを非担当型養育(20施設, 18.9%)とした。また担当制は形式的に採用しているにすぎず、いわゆる養育担当制とはいえないとする施設が8施設(7.5%)認められたが、これは中間型養育として、これら養育タイプについて、各々健康児のDQ値を比較してみた(第10図)。その結果、統計的に有意でなかったとはいえ、担当型と中間型に比べて、非担当型のDQ値は低い傾向がうか

第10図 養育担当別DQ(健康児)



がわれた。これは、在院期間が長期化するとDQ値が高い傾向と併せて考察するとき、今後さらに検討の価値がある結果といえる。すなわち、担当型養育の場合、Attachment形成は、在院期間が長期に及ぶほど進むはずであり、これが乳幼児の精神発達に効果をもつことが予想されるからである。

(3) 在院中の情緒的・行動的問題

在院中の乳幼児の情緒的・行動的問題については、その出現の経過について調べてみた。結果は第7表の通りである。結果のうち、出現数の最も多いのは指しゃぶりである。これを出現経過から見ると、入院直後継続して認められる傾向があるほか、その後も増加傾向がうかがわれる。これに対し、同じ常同型の行動でも、Head Banging や Body-Rocking は少ない。しかし、物しゃぶりもふくめ、これら常同型行動は、在院期間が長期化するにつれ、やや増加する。この行動型は Attachment の代理機能を持つとの仮説が知られているが、そうした視点からは Attachment 形成の遅れや歪みが、担当制等の努力があるにもかかわらず、指摘されることは妥当かも知れない。このことは、後追いの激しさがその後も減少せず、見知らぬ人や物への不安も持続しており、落ちつきなく多動な傾向や、他人の注意をひこうとする傾向も同様であるところからも推察される。

他方、感情表現が乏しく、無気力な傾向は入院直後の時点に比べ、その後減少する。人見知りやまったく認められないという項目でも同様である。こうした傾向は、逆に Attachment 形成の改善の結果と解釈される。

第7表 在院中の情緒的行動的問題

	入院直後		ある期間		断続的に	計 (%)
	短期間	継続して	短期間	継続して		
イ 指しゃぶり	18	40	32	48	11	149 (30.0)
ロ 夜泣き	36	12	40	4	22	114 (22.9)
ハ 見知らぬ人や物に、ひどくおびえたり、不安を示す	11	20	34	21	13	99 (19.9)
ニ 後追いがはげしい	23	9	26	17	10	85 (17.1)
ホ 怒る、泣く、はしゃぐなど感情が変りやすい	17	12	13	14	12	68 (13.7)
ヘ 人見知りがあったくない	14	27	7	4	4	56 (11.3)
ト 感情表現乏しく無気力	24	11	11	5	3	54 (10.9)
チ 奇声をあげる	3	7	20	8	9	47 (9.5)
リ 落ちつきなく多動	6	8	7	14	6	41 (8.2)
ス 物しゃぶり	6	8	10	12	3	39 (7.8)
ル 絶えず他人の注意をひこうとする	6	5	7	11	10	39 (7.8)
ヲ 頭をうつ	5	1	14	4	5	29 (5.8)
ワ 体をゆする	2	4	7	3	3	19 (3.8)
カ 自慰	0	1	1	2	2	6 (1.2)
コ その他	3	5	3	2	5	18 (3.6)

IV 結 び

本研究は、乳児院退院時における乳幼児のDQ値を中心とした結果に基づき、初期環境における Deprivation と Separation の影響について検討した研究の一部である。

結果の中で、特に注目されるのは、在院期間が長期に及ぶ場合には、退院時のDQ値が短期入院の場合に比べ高くなる点であろう。この傾向は、退院時の体重が月齢の高いほど勝れている傾向とも一致している。ともに、乳児院の近年の養育水準の高さをうかがわせる結果と考

えられる。しかし、発達成績のプロフィール分析の結果は、言語理解の発達領域の遅滞は依然として残っているといわざるをえない。今後の課題といえよう。

また、入院前の養育経験別にみると、母親以外の養育経験を持つ対象児のDQ値は高い。masked deprivation 仮説を支持する結果かも知れない。担当型養育の効果は十分とはいえないが、認められる。しかし、情緒的、行動的問題からみる限り、今後の問題を残している。

(本研究の調査にあたり、ご協力いただきました全国社会福祉協議会乳児福祉協議会及び乳児院関係諸氏に対し、厚く感謝致します)

資料1

I 施設表

- 施設名:
- 経営主体: ①都道府県・指定都市 ②市町村 ③社会福祉法人 ④その他 ( )
- 養護施設の併設の有無: ①併設している ②併設していない
- 保母・看護婦の勤務形態: ①2交替制 ②3交替制 ③その他 ( )
- 保母・看護婦の養育担当 (受持ち制) ①こどもの受持ち制をとっている ②こどもの受持ち制をとっていない ③その他 ( )
- 児童定員: 名
- 在院児の月齢別人数 (1月31日現在):

	0~6か月未満	6~12か月未満	12~18か月未満	18~24か月未満	24~30か月未満	30~36か月未満	36か月以上	計
男								
女								
計								

乳幼児行動観察表

Table with columns: 観察時間 (Observation Time), 観察者 (Observer), 観察項目 (Observation Items), 観察結果 (Observation Results), 備考 (Remarks). Contains detailed notes on child behavior.

Table with columns: 観察時間 (Observation Time), 観察者 (Observer), 観察項目 (Observation Items), 観察結果 (Observation Results), 備考 (Remarks). Contains detailed notes on child behavior.

Table with columns: 姓名 (Name), 性別 (Gender), 年齢 (Age), 入院時期 (Admission Period), 退院時期 (Discharge Period), 入院理由 (Reason for Admission), 入院の理由 (Reason for Admission), 経過 (Course), 備考 (Remarks). Contains detailed patient information.

I 児 童 表



標準 月令	原 点	社会性・情緒 (対人関係)	評 定	標準 月令	原 点	生活習慣 (食事・排泄・睡眠)	評 定	標準 月令	原 点	言語・理解	評 定
30	1	快いときと不快いときを区別する		30	1	空腹時に指で胸を叩く		30	1	保育者に泣き声の意味がわかる	
60	2	あやす顔をみて笑う		60	2	服一杯になると乳首を舌で押出す		60	2	喃語(短母音ア、ウ等)を出す	
75	3	あやすときやむかむかがなれど泣く		90	3	乳首をのむとき哺乳ビンが熱い		90	3	BuBu、KuKuという	
90	4	そばで歩く人を目で追う		120	4	スプーンからのむことができる		120	4	キョーキョーという	
105	5	声をたてて笑う		150	5	哺乳ビンを見るときれしやうとする		150	5	ひとりですて声を出して遊んでいる	
120	6	イナイナイアアをするよるこで笑う		180	6	哺乳ビンをしゃぶる		180	6	人に向って音を出す	
150	7	見なれぬ人が来るとじつと見つめて表情が変る		210	7	スプーンを保育者から取り上げ自分の口につけてみる		210	7	ア、ア、ア、ア等多音節音を出す	
180	8	手を差し出されると自分から体をのり出す		240	8	人が食べているのを見て欲しがる		225	8	マ、マ等単音節をいう(ダダ、バなど)	
195	9	担当保育者と他の区別がつく		255	9	哺乳中期(かゆ)をしゃぶる		240	9	MaやMuを声に出す	
210	10	要求があるとき声を出しておどきの表情をかく		270	10	茶碗などを両手で持って口には運ぶ		270	10	イナイイ、ニギニギ、ハイハイ等の動作をする	
240	11	よく指いてくれる人を見たと自分から体をのり出す		300	11	マンマンといて食事の催促をする		300	11	おとなの言葉を理解して行動(ハイハイ、しましやう)する	
270	12	保育者の注意をひこうとする		330	12	哺乳ビンを自分で持って自由に飲む		330	12	絵本の頁をめよく熱心にする	
300	13	イクマケムというとはっきり手をひっこめて顔をみる		360	13	自分でスプーンを持ちすくって食べようとする		345	13	食べ物のことをマンマンタウマウ等という	
330	14	ものを相手にわたす		450	14	水などひとりでのむといつてきかず手伝うと怒る		360	14	要求を3つ理解する(ノンネ、タッタ、いらっしやい等)	
360	15	顔に笑いかげおしきをしたりして遊ぶ		495	15	人に食べさせてよろこぶ		405	15	単語が2つ出る	
450	16	おとなの顔をかかぬがいられたらする		540	16	食物以外は口に入れなくなる		450	16	絵本を見て知っているものの名をいって指し示す	
480	17	子どもの中にまじってきけんよく遊ぶ		558	17	ヨーグルトとスプーンを使ってひとりですく		480	17	簡単ないつけを理解する(○を持って来ようだい)	
510	18	玩具を取り合		576	18	自分の口とをひとりですく		510	18	目、口、耳など指をさす	
540	19	いけないいうとふざけてかえってやる		594	19	自分の排泄物に興味をもって見ている		540	19	本を眺めるとせがむ	
585	20	困難なことに出席や助けを求め		612	20	おしっこしたあとでゲーターといつて知らせ		585	20	自分の名を呼ばれるとハイと返答	
630	21	おとなの視線を避けてフワフワなどおどろいて逃げか		630	21	おいしいものを食べるとオイスイという		630	21	お話してやると静かに聞くのが好きになつた	
653	22	保育者とままとこのまねをする		660	22	こぼすとふこうとする		675	22	おとなのいつた単語をオーム返しする	
675	23	他の子どもにじつとする		690	23	靴をぬぐ		24	23	本をひとりですくたり長い間見で楽しんでる	
698	24	友だちと手がつなげる		24	24	大便をましがなく散る		255	24	ナアとまき	
24	25	子ども同士で追かけっこをする		27	25	靴をはく		27	25	簡単な文を言う(遠慮)	
26	26	友達の名がわかる		30	26	食事がすむとゴテゴテという		285	26	書籍に指をつけて部分的にりたえる	
28	27	怪しいものがあるときかきかきして待つ		32	27	おしっこ前に散る(圧間は押さない)		30	27	名前を尋ねると姓と名をいう	
30	28	ふざけて保育者を突きつたり顔を押しつたりする		34	28	のみこまないでプクプクできる		33	28	自分の名をいれて話をする	
33	29	年下の子どもと遊ばせられたがる		36	29	殆んどこぼさずひとりで食べられる		36	29	ボク、ワタシ等という	
36	30	電話でこつて交互に会話する		39	30	夜間オムツ不要となる		38	30	3語文を構	
39	31	ままと遊びを30分以上もできる		42	31	自分から小便に行き、おとなの手をかける		40	31	テレビで子どもが主人公の番組を熱心に見る	
42	32	友だちのものを順番に使う(ぶらんこ等)		48	32	鼻をかむ		42	32	どうして、どうしたの等という	
48	33	かたがたで保育者や夜とかかれる役を理解する						44	33	自分の名前を眺む	
54	34	鬼ごっこができる									
原 点 計				原 点 計				原 点 計			
発 達 月 令				発 達 月 令				発 達 月 令			

全体

原 点 計	
発 達 月 令	